

アマレヤ  
とともに

## アマレヤ劇団の方々と一緒に対雁を訪れて

(語り) 榎木 貴美子、(聞き手) 新井 藤子

私達アイヌ女性とアマレヤ劇団の方々の交流がいつから始まったのかはもう思い出せませんが、今日もアマレヤ劇団とのコラボで、パフォーマンスの撮影を頑張ってきました。親交を重ねるうちに、明治時代の樺太アイヌの歴史に触れる機会もあって、札幌のお隣、江別の対雁に大勢の樺太アイヌが連れて来られ、亡くなったことをアマレヤの女性達にお話したこともあります。

## 私の語り～樺太アイヌとして



何故、樺太アイヌの方々の尊い命が犠牲になってしまったのか？1875(明治8)年千島・樺太交換条約

によって、宗谷に近いアニワ湾一带に住んでいた樺太アイヌ841名が宗谷に移住。宗谷岬から樺太までの距離は約43キロ。晴れた日には岬から樺太が肉眼で見えます。当時の北海道長官、黒田清隆は、望郷の念にかられて逃げ帰る者がいては困ると考え、翌1876(明治9)年、行く先も告げずに樺太アイヌ854名、更に、宗谷で暮らしていた樺太アイヌを無理矢理船に乗せました。最初は、樺太に近い宗谷なら、いつでも帰ることができると考えた者もいましたが、宗谷から離れ、そのうち樺太が見えなくなり、利尻島も遠ざかっていく。その不安たる気持ちはいかばかりか…？留萌沖辺りまで来て、ようやく行く先を聞かされる。憤慨のあまり血を吐き、船上で憤死する者も出た程でした。

ツインカリ  
皆で対雁へ

私の語りから、是非とも対雁に連れて行ってほしいというお話になりました。アマレヤの女性は元々、私達樺太アイヌ女性の先輩にあたるチュフサンマさんが、ポーランドの樺太アイヌ研究の先覚者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)と結婚して二児をもうけた経緯があることを知っていて、樺太アイヌに大変な好意を持って下さったのです。私達のご縁を結んで下さった丸山博先生の記録によると、この日は2018年の10月11日。夕暮れが迫る中、通訳の方々とも一緒になって皆で対雁へ向かいました。

まずは当時樺太アイヌが住んでいた場所。その場所の半分は、現在石狩川の河川敷に、残りの半分は石狩川の川底になっています。この荒涼とした場所で、約400名近くが天然痘やコレラによって命を落としました。

次に榎本武揚が払い下げ、所有していた10万坪の土地。駐露特命全権公使として千島・樺太交

換条約に調印した榎本は、そこに「海の民」といわれていた樺太アイヌを強制的に農業に従事せよとしたと思われます。河川敷側の道を一本渡ると現在は公園になっていて、高い五角形の台座の上で馬に乗って片手を前に指し示す榎本武揚の銅像が建っています。ここを訪れるたび、支配する者と抑圧された者にはこんなにも雲泥の差があるものなのかと胸が痛む思いがします。

最後はすぐ近くの江別市営墓地、樺太アイヌの大勢のウタリ(同胞)が眠る場所を案内しました。忘れてはならない大事な歴史のためにお墓があります。しかし、「樺太移住旧土人先祖の墓」と刻まれたこのお墓には、ご遺骨が入っていません。1日に何人もの方々が亡くなったため、大きな穴が掘られ、そこにまとめて葬られ、火葬されたのです。

辺りは薄暗くなり始めていましたが、持参した樺太アイヌの弦楽器、トンコリをお墓の前で演奏しながら歌いました。最後の語りの時には、アマレヤの方々が涙ぐんでいるのが暗がりの中でも私の目にははっきりと見えていました。



## 現在のコロナ禍にも通じること

丸山先生は「アマレヤの方々にとっては、対雁でのこの心の体験が、アイヌ女性達とのパフォーマンスを続けていく上での原動力のひとつになっている」と仰って下さいました。明治時代、樺太アイヌの先人の皆様は、天然痘やコレラで大変なご心痛とご苦勞をされたことは、令和の現在、コロナと名前が変わっても、皆大変な目に遭っていることに通じるところがあると思います。最近では感染者も少なくなり、とても喜んでいましたが、またまた変異株が現われて来て、心穏やかではありませんね。

あの日、お墓の前では「ポーランドの方々と一緒にお参りに来ました、今日はこれで帰りますが、また来ます」とお約束して帰路につきました。私達の交流とパフォーマンスの発展はまだまだ続きます。

(ならき・きみこ、樺太アイヌ協会、あらい・ふじこ)

=写真=左:榎木貴美子、右:対雁の風景をカメラに収めるアマレヤ劇団の女性(写真 丸山博)



## アイヌ女性とアマレヤ劇団の 5年間の繋がり

多原 良子



アイヌ民族には独自の文化や風習、慣習、自然との関わりや、精神文化があります。アイヌの先祖が暮らした伝統時代に思いを馳せてみましょう。

広大な大地、果てしなく広がる海原、流れゆく川、豊かな自然の中を動物が往来し、山野にはたくさんの植物が群生して、その中にコタンがありアイヌは日々の生活を営んでいました。

平穏な暮らしのなかに、たくさんの自然現象が去来した事でしょう。アイヌは、人間のまわりに存在する事象には「魂」が宿っていると考えました。この「魂」をいわゆる「神」とは違った次元で捉えて、人間生活に貢献するもの、なくてはならない、人間の力ではどうしようもない魂の強いものを神として意識しました。人間の認識の度合いで神のランクが決まったようです。

### ポーランドとアイヌ民族

ポーランドは東西を強国に挟まれ幾度となく領土を奪われたり、分割されたり、国じたい地図上から消えてしまった悲惨な歴史を歩んだといわれます。ポーランド人は、その苦難の時代をいきながらも、民主化運動の末に見事に再興しました。

アイヌ民族もまた、何の相談もなく樺太・千島交換条約を日本とロシアで締結し、樺太アイヌ、千島アイヌは強制移住を余儀なくされました。慣れない土地での生活は困難を極め、移住先では半数以上が亡くなりました。千島アイヌは現在名乗る人もなくその文化は消え去りました。

1869年、蝦夷地(北海道)は一方的に日本の領土とされ、アイヌ民族はすべての生活手段を奪われ、構造的な差別の中で伝統的な生き方ができなくなりました。とりわけアイヌ女性は「ジェンダーと民族差別の交差性」、差別が複合的・重層的に絡み合う過酷な「複合差別」に苦しんできました。長年の貧困や偏見による差別でアイヌ女性は、自信を失っていました。

### メノコモシモシとアマレヤ

複合差別から脱却し、アイヌ女性が誇りをもって生きるために主体的な活動が重要と考え、2017年に「アイヌ女性会議メノコモシモシ」を立ち上げました。「モシ」はアイヌ語で“目覚める”という意味です。先祖から受け継いだ智慧を発信しエンパワメントするとの思いを込めた名称です。

ポーランドのアマレヤ劇団との繋がりには、5年前札幌で「歴史に翻弄された先住民族女性」をテーマにした現代劇でコラボしたことがきっかけです。メンバーの一人が舞踏劇に参加し、アイヌ民族と同じような歴史をたどった先住民族女性を描いた物語に学び、新たなアイヌ女性の生き方を教えられたのです。

### 『アイヌとカムイのためのレクイエム』

昨年、アマレヤとメノコモシモシで『アイヌとカムイのためのレクイエム』の共同公演をし、その一セッションに初めて参加しました。芸術は解らない、まったく縁がない、そんな感性もない自分でしたが、言われるままに演じていると自分の魂の奥にあったものが、ふつふつと不思議な感覚で沸いてくるのを感じたのです。やりたい事・やるべき事はこれだと思える事がはっきりと解りました。もしこのような機会がなければ、自分の魂の叫びに気づかずじいたのかもしれません。参加メンバーは、それぞれの魂や心の叫びを感じ取り、喜びに目覚めたことと思います。これが『レクイエム』をやった意味だと思いました。

アマレヤ劇団とメノコモシモシがこのように繋がったことを振り返ると、今もって不思議な縁を感じざるを得ません。1887年ピウスツキが政治犯としてサハリン島に流刑され、樺太アイヌのチュフサンマと運命的な出会いの末恋仲となり結婚しました。百年以上前の二人が私たちに導き繋いでくれたのかもしれない、そんな気がしてならないのです。アマレヤとメノコモシモシお互いの歴史を見つめ尊重し、また新たな未来に繋ぐものを、これからも造りだしていけることを願っています。



メノコモシモシ&アマレヤ合同公演  
2019.9.28 写真 尾形芳秀

(たはら・りょうこ、アイヌ女性会議メノコモシモシ代表)

参考文献:アイヌ民族博物館監修

『アイヌ文化の基礎知識』草風館、1993



## アイヌとカムイのための レクイエム

丸山 博



アマレヤ（ポーランド）とメノコモシモシ（アイヌ女性会議）との共演第4作『アイヌとカムイのためのレクイエム』は、コロナ禍の中で得られた数少ない成果の一つです。それはアイヌ女性の文化的蓄積とポーランド女性アーティストとの数年に及ぶ共演によって培われた能力が芸術を通して開花した瞬間です。

2021年のはじめには、日本の舞踏(Butoh)の研究者でアマレヤ劇団の芸術監督、カタジナ・パストウシヤクの振付のもと、ポーランドとアイヌの女性アーティストが一つの舞台で共演する計画でした。しかし9月になって、日本の後手後手のコロナ対策ではアマレヤのメンバーが11月には入国できないと判断し、オンライン上でポーランドと日本のチームがそれぞれ『アイヌとカムイのためのレクイエム』のタイトルで作品を映像化することにしました。

10月、動画作成のために、非商業ベースで優れたドキュメンタリー作品を制作している藤野知明監督を迎え、毎週2度のペースで打ち合わせを行った後、札幌の二か所で撮影を行い、12月30日、双方の作品を YouTube に同時にアップしました。

### 札幌で

日本側の作品は、藤野監督が場面を分割し、各場面の動きをメノコモシモシの出演者に質問するところから始まりました。出演者は、多原良子、松平亜美(つぐみ)を中心にアイヌの歴史や文化をもとに各々の動作や振り付けを考え、野外での撮影に臨みました。撮影初日は11月下旬の冷たい雨が降り続く日でしたが、皆、演技に集中し、夕方暗くなるまで撮影を続けました=写真前頁左=。12月には、ポーランドのマルチメディア・アーティスト、ベアタ・ソスノフスカが描いた出演者全員の肖像画が届き、同じ場所で後半の撮影、別の場所で最後のシーン=↑左=を撮りました。

全体を通してみると、入れ墨や耳輪を禁止されながらも先祖やカムイに感謝し、文化の火を絶やさず自らのアイデンティティを取り戻していくアイヌ女性の強さが淡々と演じられました。個人に着目すると、多原の虚飾のない演技、松平の類まれな身体表現に檜木貴美子、斎藤芳子、加賀谷京子のいぶし銀の演技が相まって、アイヌ女性の新たな境地を切り開きました。

撮影が終わるとさっぽろ自由学校「遊」の教室で多原の物悲しい歌声や檜木のムックリやトンコリの淀みのない演奏が録音され、その後、藤野監督の

手によって美しい映像と一体化しました。こうして明治以降の北海道の植民地化の中を生き抜いたアイヌ女性の連綿とした歴史がわずか18分の映像に集約されました。アイヌ女性による現代芸術が生まれた、歴史的瞬間です。

その陰には、カタジナ・パストウシヤクをはじめ、ナタリア・ヒリンスカ、ベアタ・ソスノフスカ、カロリナ・ユジヴィアク、ヨアンナ・ボロフ、アレクサンドラ・シリヴィンスカ、エルジビエタ・ウィシアク=パストウシヤクから、ポーランドの女性アーティストの温かい眼差しと献身的な関与がありました。

### ポーランドで

ポーランド側はアマレヤのメンバーにベアタ・ソスノフスカからが加わり、日本側より2、3日遅れで作品が完成しました。映像の前半では、雪の積もった林の中で木々に吊るされた小さな流木を女性の手がつかもうとしてもつかめない状況が長い間映し出されました=写真前頁右=。後半は一転してポーランド女性アーティスト5人がそれぞれメノコモシモシの出演者5人の肖像画を抱えてグダンスクの市街地を歩く場面がスローモーションで描かれました=↑右=。前半はポーランド女性がアイヌ女性の苦難を追体験し、後半はアイヌの女性への敬意、連帯を表しているといえるでしょう。

### 今後の計画

2022年には、メノコモシモシはアマレヤとの共同制作、共演の継続に加えて、元駐日ポーランド大使で能の研究者、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ博士がポーランドの国民的詩人アダム・ミツキエヴィチの『祖霊祭』をもとに2023年に制作を予定している『ポーランドとアイヌの祖霊祭』のリハーサルにも参加する予定です。100年以上前にブロンスワフ・ピウスツキによってつくられたポーランド人、アイヌ、日本人の絆を受け継ぎ、次世代に渡していくために、皆さまには、引き続きご支援を賜りますよう、よろしくお願いたします。(まるやま・ひろし、CEMiPoS\* 環境とマイノリティ政策研究センター所長)